

肱川における「かわまちづくり」について

大洲河川国道事務所 河川管理課係員 北原 右京
大洲河川国道事務所 工務第一課係長 吉岡 優平
大洲河川国道事務所 河川管理課長 太田 秀明

愛媛県大洲市を流れる肱川の約 14km 上流右岸付近の畑の前地区では、平成 20 年度から環境整備事業として、自然や文化・観光資源を利用した畑の前地区「かわまちづくり」計画を実施してきた。本事業により畑の前地区では以前より高水敷の利用頻度が向上していることに伴い、住民や観光客がより快適に利用出来るよう利用促進の検討を行った。また、畑の前地区だけでなく肱川中下流域の一体的整備を行うことで、より地域活性化が図られることを目的として、肱川「かわまちづくり」計画の検討を行った。

キーワード かわまちづくり、環境整備

1. はじめに

近年、水辺空間を利用した「かわまちづくり」という取り組みが注目されている。「かわまちづくり」とは、河川とそれに繋がるまちを活性化するため、地域特有の資源や知恵を活かし、河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成を目指す施策のことである。

現在、「かわまちづくり」は全国 140 ヶ所以上で行われており、ソフト対策、ハード対策の両方を活用した施策であるため、防災面からも期待されている。

肱川河口から約 14km 上流右岸付近の畑の前地区（図-1）では、平成 20 年度から畑の前地区「かわまちづくり」計画の整備を行っており、整備前と比べ、整備後の利用者数は約 1.7 倍（約 11000 人→約 19000 人）に増加しているが、アクセスしにくいことや、歩道が整備されていないことなどの問題を抱えていた。そのため、河川整備計画に基づき、畑の前地区「かわまちづくり」計画の利用促進検討を行った。また、肱川流域の河川空間は、「鵜飼い」や河原を使った「いもたき」、「花火大会」、富士山を背景にした「臥龍山荘」、「大洲城」等、四季折々で多くの文化・観光資源を有しており、市街部の中心を肱川が流れる大洲市は、「伊予の小京都」と呼ばれ、観光

客数は増加傾向にある。これらの文化・観光資源を活かし、更なる地域活性化と流域一帯の治水対策を図るため、畑の前地区のみならず、肱川中下流域が一体となったかわまちづくりを計画している。

本稿では、畑の前地区の利用促進検討及び、今後の肱川かわまちづくり計画の全体構想についての報告を行う。

2. 畑の前地区かわまちづくり計画

畑の前地区は、大洲市の商業施設が集中する東大洲に隣接する地区であり、地元住民の憩いの場として利用されている。そのため、更なる利便性の向上を図るとともに、河畔林や水制等を有効活用した総合学習の場として整備を行うことで人が集い、自然、歴史及び文化にふれあうことができる、にぎわいの水辺空間づくりを目的に畑の前地区かわまちづくり計画を策定した（図-2）。高水敷で、愛媛県立大洲農業高等学校および市民ボランティアの協力のもと、植栽活動が行われ、ヒマワリやコスモス、菜の花の植栽が行われている。花畑を利用するイベントとして、NPO 法人肱川流域会議水の中めがね主催の「菜の花畑でだんだん肱川」が、平成 28 年から毎年、3 月中旬に開催されている（写真-1）。

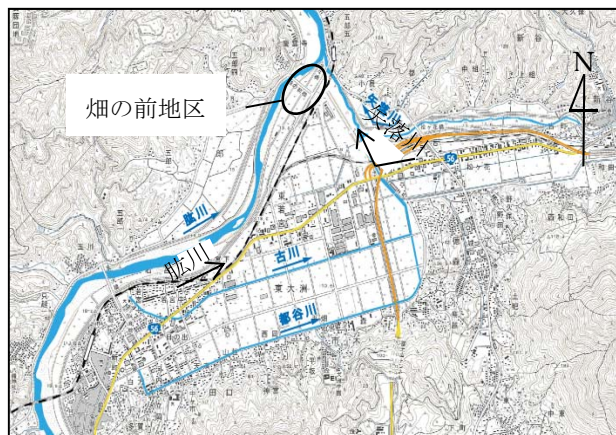


図-1 畑の前地区の位置図

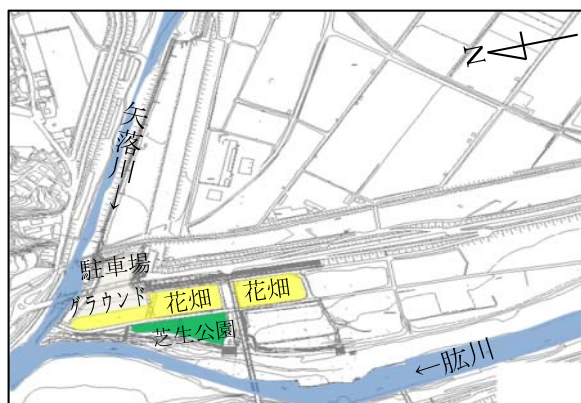


図-2 畑の前地区かわまちづくり計画概要図



写真-1 菜の花畑でだんだん肱川

3. 利用促進検討のための事前調査の実施

利用促進の検討に先立ち、現地調査、アンケート調査、関係機関にヒアリング調査を行い、対象地域の現状を把握した。

進入路の整備、除草管理と樹木間伐、歩道整備の要望が多く、未利用地の不陸整正、階段・スロープの設置といった要望は少ないという調査結果が得られた。

調査結果をふまえ、優先整備の要望の数をふまえ利便性、汎用性等を勘案して効果が高いと考えられる以下の項目について整備検討を行った。

- (1) 大洲市街地方面からの進入路整備
- (2) 花畑の歩道整備
- (3) 既設石積階段間詰め

4. 利用促進整備検討内容

- (1) 大洲市街地方面からの進入路整備

a) 問題点

畑の前地区への車両進入路は1箇所のみで大洲市街地方面側からの進入を行う場合、鋭角的な進入を余儀なくされているため出会い頭の事故や洪水時の退出に渋滞が懸念される(図-3、写真-2)。そのため車の流出入時の交通安全、利便性の観点から、進入路の整備要望が多い。

b) 整備計画案

大洲市街地方面からの流入を安全に行うため、進入路新設を行う。畑の前までのアクセスは、既に整備されており、進入路のみの整備で動線を追加することが可能である(図-4)。構造としては、現進入路と堤防の交差箇所へ取り付け、現進入路の機能を追加することを目的に整備を行う(写真-3)。これにより、安全な出入が可能となるとともに、洪水にお

ける避難もスムーズに行うことが可能になる。

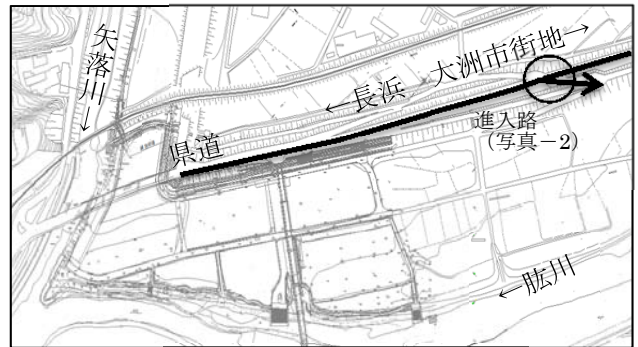


図-3 現況進入路概要図



写真-2 現況進入路



図-4 新設進入路概要

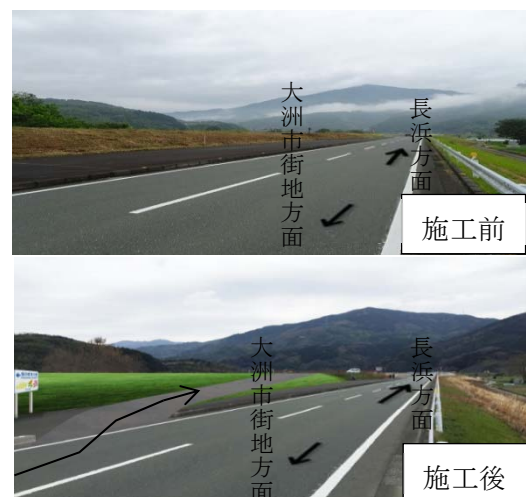


写真-3 進入路完成パース

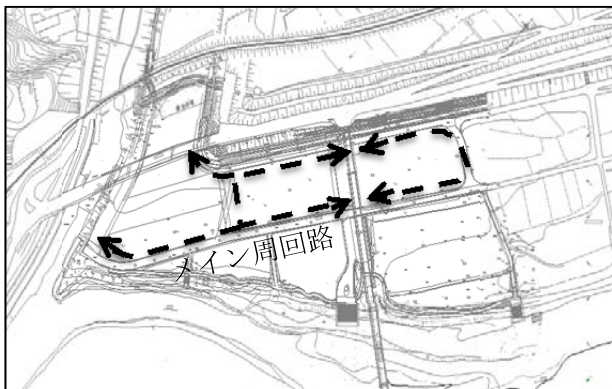
(2) 花畑の歩道整備

a) 問題点

メイン周回路は幅員 4m 程度の道路であり、車両通行は十分可能であるが、歩道がないため歩行者は車道を通行することとなり、歩行者が安全に通行する空間がなく、危険な状態である（図－5、写真－4）。このため、花の観賞時期には多くの方が訪れることから、整備要望が多い。

b) 整備計画案

周回路に沿って歩行者相互、車いす相互の離合が可能となる有効幅員 2.0m の歩道を花畑側に新設する。また、道路周回路の横断箇所には横断歩道を設置することとし、区画線(カラー)により歩車分離効果を発現させる（写真－5）。高齢者、障害者の利用時における配慮へもつながるため、利用促進効果が高い整備項目である。さらに洪水時には、迅速な避難が可能となる。



図－5 現況周回路概要図



写真－4 現況周回路



写真－5 花畑の新設歩道完成パース

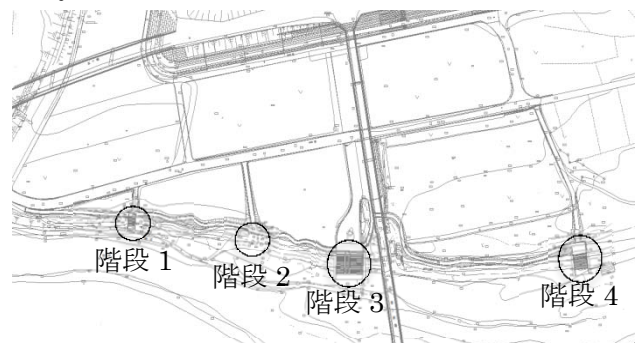
(3) 既設石積階段間詰め

a) 問題点

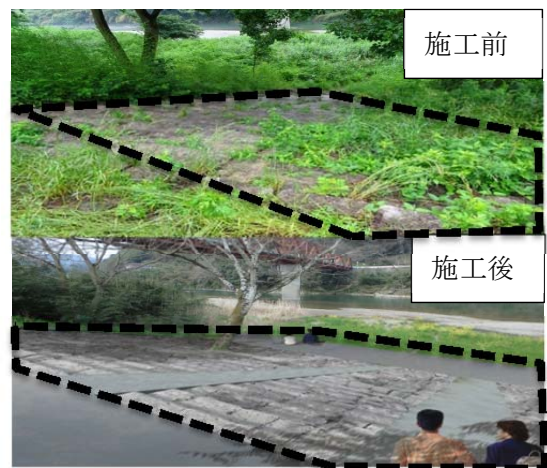
肱川へのアクセスのために利用される階段は4箇所あり（図－6）、整形された石により構築されているが、石積の間からの植生が目立つとともに土砂の堆積が見られることからスムーズなアクセスが妨げられる。

b) 整備計画案

石積の隙間をコンクリートで充填し、草木の植生を抑制することにより、水辺へのアクセスが可能になる。



図－6 階段位置図



写真－6 既設石積階段間詰め完成パース

5. 肱川かわまちづくりの全体構想

これまでに行われてきた畑の前地区「かわまちづくり」計画及び、利用促進整備の検討結果を参考に、愛媛県や大洲市などの地方自治体への支援として、肱川中下流域の一体的整備を図る。

エリアとしては、鹿野川湖周辺から河口長浜までの肱川下流域の整備計画としており、肱川本川を環境整備軸として位置づけ、産業拠点である東大洲地区、文化財、公園等、観光資源が集中する肱南・肱北地区周辺を環境整備主要拠点とし、肱川環境整備軸の始端となる鹿野川湖周辺、終端となる長浜を地域拠点として設定した。

環境整備主要拠点を、畑の前地区から肱南地区に向けて肱川、河川敷の景色を見ながら移動できる「清流肱川ゾーン」、大洲城や歴史的町並み、鵜飼い等、伊予の小京都を満喫できる「水郷大洲ゾーン」、富士山を背景に豊かな田園風景が広がる「自然交流ゾーン」の3ゾーンにわけて整備を行う(図-7)。このように地域拠点、環境整備主要拠点をつなぐ「肱川を見失うことのない移動軸」の整備を行い、水郷大洲を通る肱川の魅力を最大限に活用して、地域活性化を図るとともに、大洲市、愛媛県の両方で推進しているサイクリングや、愛媛国体で注目され、地域でも盛んに行われているカヌーの移動軸への整備を検討し

ていく。

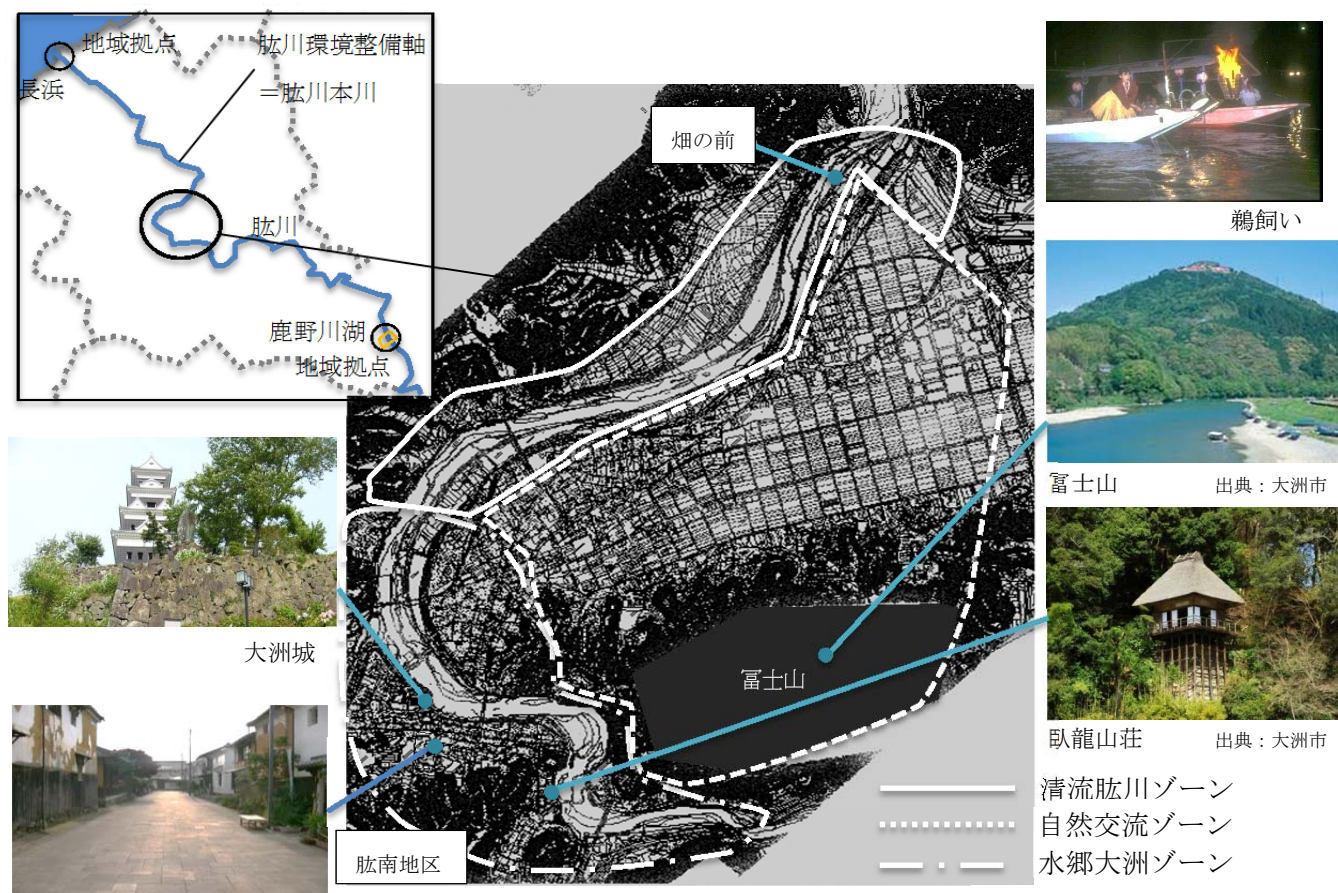
さらに、ソフト施策として「大洲城」や「臥龍山荘」など歴史的景観を活かした、オープンカフェや屋台等、川沿いや高水敷等の商業的利用解放することも検討している。

6. おわりに

現在、畑の前地区は、インターネットで検索しても関連情報がヒットせず知名度は低いことから来訪者増加にむけた広報活動が今後の課題となる。

また、雑草の繁茂も多く、効率的な維持管理手法が求められており、現地調査、ヒアリング調査を行うことで、更に利便性・安全性を向上させ畑の前地区が快適に水辺とふれあえる場となるよう今後も検討を行っていく。

肱川「かわまちづくり」を発展させていくためには、流域全体で組織的に行う必要があり、住民、市、町、民間事業者、河川管理者等の関係者間の合意形成を密にはかることで、水辺空間の活用など水に関する幅広い知識・情報を共有することが必要である。



歴史的町並み（おはなはん通り）

図-7 肱川かわまちづくり計画概要図